

13	東京学芸大学附属大泉小学校	H29~R3
----	---------------	--------

令和3年度研究開発実施報告書（要約）

1 研究開発課題

グローバル化等による変転激しい社会の中で、自立と共生に向けて豊かな未来を切り拓いて生きることができる資質・能力を育成するため、現代的な諸課題等を既存教科の枠をこえて探究的に学ぶ新たな教科を創設し、既存教科との相互関連性をもたせて深い学びにする教育課程及び評価方法に関する研究開発。

2 研究の概要

本研究の趣旨は“「教科の枠をこえた探究的な学び」を充実させた教育課程の必要性とその開発”である。具体的には「探究科」を創設し、探究科を含む教育課程及び効果的な指導方法・評価方法の開発を行い、実践して修正・検証する。

(1) 「探究科」の目標と育成する資質・能力を設定する。（「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力、人間性等」）

(2) 教育課程の編成 及び 効果的な指導方法の開発を行う。

・教育課程編成の具体的取組

①探究科を6領域で構成し、1～6学年まで6単元ずつ36単元を開発。

②探究科の時数を各学年週5～6時間程度確保。

③既存教科の時数削減（教科のスリム化）。

・効果的指導方法の具体的取組

①「探究のテーマ」を設定した教科の枠をこえた探究学習の展開

②「対象をとらえる力」を単元毎に設定

(3) 資質・能力を評価する具体的な方法を開発する。

・自己評価活動におけるルーブリックの活用。

・自己評価活動を活かした評価方法開発

3 研究の目的と仮説等

(1) 研究目的

多様で変化が激しく予測困難なこれからの時代においては、一つの決まった見方や単一の知識だけでは立ちゆかず、様々な知識や知恵を幅広く応用したり、全く異なる教科・領域・分野や経験との関連を見いだしたりして創造的に問題を解決していくことが必要となるだろう。学校教育における学習でも、決まった答えを学ぶのではなく、広い視野で多面的・多角的に捉え、教科の枠をこえて関連させて考え、よりよい解を探り問題解決して、自ら行動していく資質・能力が大切になっていくと考えている。本研究の目的は、そのような資質・能力を育成すべく、「教科の枠をこえた学び」を充実させる教育課程及び効果的な指導方法・評価を開発することである。

(2) 研究仮説

上記の研究目的のため、下記のような研究仮説を設定した。

①「教科の枠をこえた探究的な学習」を、小学校の教育課程においても、現行より充実させることが重要であるだろう。

既存の教科学習の重要性は変わらない。しかしながら、児童は、教科で学習すると「算数の時間」「国語の時間」と、教科の枠内に閉じた思考で、すでに設定されている一つの

答えを求める学びになりやすい傾向がある。小学生の発達段階から、教科や領域をこえて思考し、自分なりの納得解を議論しながら導き出すような探究的な学びの楽しさの感得と資質・能力の育成をする学習を、現行より充実させていくことが重要であると考え。

②「教科の枠をこえた探究的な学習」は、「領域」を設定して構成することで、児童は、系統的にバランスよく学ぶことができると共に、学校も継続的な取組にできるだろう。

領域を設定したのには2点の理由がある。一つは、SDGsやグローバルイシューなど様々な課題が、子どもたちの将来にとって看過できない問題になっているということである。現代的な諸課題等をバランスよく配置し、系統性をもたせて学ぶことが、これらの課題に対し確かな学力とするために重要であると考え。「領域」を設けた上で、コンピテンシーベースで、学習内容を組み立てていく。

もう一つの理由は、実践の継続性・安定性である。「総合的な学習」では、学習題材・対象は学校裁量となっているが、現場では何をどう取り組むか戸惑いもある。また、学校により内容が異なるので、教員異動が活発な現場においては、継続性にも困難さがある。全国でもある程度共通に取り組めるよう、「領域」を定めて、学習単元を構成するほうがよいと考える。そこで、本校は6領域を設定し、「探究科」と命名した。

③教科をスリム化により、「教科の枠をこえた探究的な学習」を、週に5～6時間設定できるだろう。

「教科の枠をこえた学習」は、現行で行おうとすると「総合的な学習の時間」で行うことになるが、バランスよく学ぶには、週に2時間では少なすぎる。また、週2時間では長期にわたる単元となり、児童の意欲を継続することが難しい。

探究科で設定した学習内容が教科にある場合、その内容の扱いを見直すことなどにより、教科のスリム化が可能である。生活科や総合的な学習の時間の時間に加えて、他の既存教科の時間削減し、それを新教科「探究科」の時間として割り当て、個別の追究活動を重視した探究的な学習の充実を図る。週5～6時間を設定する。

④7つの「対象を捉える考え方」を、単元毎に設定することで、探究的な見方・考え方を汎用的に使える確かな学力として、効果的に育成することができるだろう。

探究科では、児童に思いっただけで探究させるのではなく、その単元で育成したい「対象を捉える力」を設定する。このことで、バランスよく探究的な見方・考え方を育成できると共に、様々な場面で、汎用的に使える力として育成していけるのではないかと考える。指導者だけでなく、児童にも意識させ、探究の過程を経由して学習を進めていく児童が、対象を捉え、探究を進めていくために活用する確かな学力として身につけられるようにしていく。

⑤「探究のテーマ」を設定して探究学習を展開にすることで、児童は、教科の枠をこえて考え、概念を豊かにし、本質的な理解につながる深い学びになっていくだろう。

探究科の学習では、単元毎に「探究のテーマ」を設定し、単元の中で児童に示すようにする。「探究のテーマ」とは、その単元で育成したい本質的な理解や価値観に繋がる議論と解釈の基盤となる命題的な文言である。例えば、「人は生き物の生存に影響を与える」「身の回りの自然・環境に合わせて暮らすことで、私たちは生活を豊かにしている」「人間の多様性はその人の置かれた時代や土地から形成される」といった文言である。意図的にやや抽象的な言葉にしている。抽象度があるからこそ、これが設定されていることで、とかく児童の探究が一つの教科や領域の中での判断となりがちなところを、広い視野で、他の教科や領域

・分野との関連も見ながら、問題を解決していこうとする態度の育成にもつながっていくと考えている。「探究のテーマ」を使った指導方法を確立する。

(3) 教育課程の特例

①新設教科「探究科」の目標と育成する資質・能力

「探究科」の目標

グローバルで探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的に探究する学習活動を通して、自分・社会・自然やそれら相互のかかわりに対し、課題を解決し、自己の価値観を創造し、未来に向けて主体的に行動していくための資質・能力を次のように育成することを旨とする。

(知識及び技能)

探究的な学習の過程において、自分・社会・自然やそれら相互のかかわりにおける課題の解決に必要な知識及び技能を身に付け、課題に関わる概念を形成し、自己との関わりを通して理解できるようにする。

(思考力、判断力、表現力等)

探究的な学習を通して、課題の設定、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現などの問題を解決する力や対象を捉えて考える力を身に付け、意味を形成できるようにする。

(学びに向かう力、人間性等)

探究的な学習に自らの学びをコントロールし、多様な他者と学び合いながら取り組むとともに実社会・実生活に影響を与える責任を感じながら、自己の価値観への自覚と未来に向けて積極的に行動していく態度を養う。

②6つの領域による単元構成

- ・「A：人の在り方」「B：場所と歴史」「C：創造表現」「D：自然と科学」「E：社会と暮らし」「F：地球共生」の6つの領域を設定する。
- ・年間6単元、6年間合計で36単元を設定する。(A～Fの6つの領域の単元を年間に1単元ずつ、合計6単元設定する。A～Fの各領域の単元が、6年間で毎年1単元ずつ設定されることになる。)

③授業時数(【別紙2】を参照)

- ・新設教科「探究科」の授業時数を、各学年200～230時間程度とする。
- ・生活科と総合的な学習の時間の全ての授業時数を、「探究科」の授業時数とする。
- ・国語科の「書くこと」の内容と「話すこと聞くこと」の内容のうち、各学年年間70時間程度の内容を「探究科」の中の実践的な素材を活用して指導する。
- ・社会科の既存の内容について重点化や重複内容の削除などを行い、社会科の授業時数を従来の約四分の三の授業時間数とし、削減した時間数分を「探究科」の授業時数とする。
- ・理科の既存の内容については削減せず、導入や課題設定の工夫、発展的な活動の縮小などを行い、理科の授業時数を従来の約三分の二の授業時間数とし、削減した時間数分を「探究科」の授業時数とする。
- ・その他の教科の内容については削減せず、導入や課題設定の工夫、発展的な活動の縮小などを行い、各教科5～10時間程度の授業時数を削減し、その時間数分を「探究科」の授業時数とする。

4 研究内容

(1) 教育課程の内容

① 6つの領域について

「探究科」の目標にある、「自分・社会・自然やそれら相互のかかわりに対し、課題を解決し、自己の価値観を創造し、未来に向けて主体的に行動していくための資質・能力」を育成するために、学習の対象となる「自分・社会・自然やそれら相互のかかわり」として、A～Fの6つの「領域」を設定した。（【表1】を参照）「探究科」の各単元は、この6つの領域のいずれかに位置付くように構想される。

【表1】学習範囲としての6つの「領域」と、その探究例

領域	探究例
A：人の在り方	自己の本質／信念と価値観／個人的、身体的、心理的、社会的、精神的な健全さ／家族、友人、コミュニティー、文化圏を含めた人間関係／権利と責任／人間であるということの意味
B：場所と歴史	空間と時間における位置づけ／個人の歴史／故郷と旅／人類による発見、探検、移住／地域社会とグローバルの観点から見た個人と文明の関係およびそれらの相互のつながり
C：創造表現	アイデア、感情、自然、文化、信念、価値観の発見と表現／私たちは自分の創造性をどのように振り返り、発展させ、楽しむのか／私たちはどのように美を鑑賞するのか
D：自然と科学	自然界とその法則／自然界（物理学的・生物学的）と人間社会の相互作用／科学原理の理解を人間がどのように利用しているか／科学と技術の発展が社会と環境に及ぼす影響
E：社会と暮らし	人間がつくったシステムとコミュニティーの間の相互のつながり／組織の構造と機能／社会のなかで下される意思決定／経済活動と人類および環境への影響
F：地球共生	限られた資源を他の人々や生物と共有するにあたっての権利と責任／コミュニティーとその内外の関係／平等な機会へのアクセス／平和と紛争解決

6つの「領域」は、私たちを取り巻く「自分」「社会」「自然」の三つの関わりから捉えて6つに整理した、どの地域でも、どんな背景を持つ人にも望まれるテーマであると考えます。

この6つの「領域」は、国際バカロレア機構のPYPにおける「教科の枠をこえたテーマ」や、そのPYPの基となったアーネスト・ボイヤー（1977）の8つの「核となる共通性」などを参考にして設定した。

【表2】「探究科」6年間の単元配列（領域名：単元名）【令和2年度版】

	1学期前半	1学期後半	2学期前半	2学期後半	3学期前半	3学期後半
1年生	E：わたしたちのがっこう	C：ところをつたえるしぐさとひょうじょう	F：いきものとかかわろう	D：いきものとかせつへのんか	A：かぞくのなかでのやくわり	B：いままでのわたし、これからのわたし
2年生	C：1年生に教えてあげよう	F：どうぶつのいのちをふやそう	D：やさしいパーティーをひらこう	F：いろいろな国のあそびをうまくできるようにしよう	C：あんぜんとあんしんのしごとをけんきゅうしよう	A：タイムカプセルを作ろう
3年生	B：生き物と周りの環境	A：周りの環境と生きる	E：練馬の生き物が運ぶしあわせ	C：想いを届けるかたち	D：生活を豊かにする法則	F：地球の未来と私たちの選択
4年生	A：心と体の成長が自分らしさを拡充させる	B：人の思いや知恵が地域を発展させる	D：技術は試行錯誤の産物である	E：多様性が有用な社会をつくる	F：わたしたちは工夫して水とかかわっている	C：感情や信念は表出することで形となる
5年生	A：人の健康をいろいろな見方でとらえよう	B：地域の歴史と自然と共に生きる	F：自然災害と生きる	E：情報ネットワークと私たちの生活	D：データから規則性を見つけよう	C：美術作品を保護することとは
6年生	E：わたしたちの生活と政治	A：自分と他者によってつくられる自己	F：地球の一員として生きる	D：分析、検証と情報、アイデア	B：歴史の変遷と過去からの学び	C：自分の表現が社会に与える影響

「探究科」では、年間6単元、6年間合計で36単元を設定する。A～Fの6つの領域の単元を年間に1単元ずつ、合計6単元設定する。【表2を参照】A～Fの各領域の単元は、6年間で毎年1単元ずつ設定され、系統的にカリキュラムが構成される。

② 7つの「対象を捉える考え方」について

目の前の対象に対して追究活動を始める際に、児童が問いを生むために活用できる考え方として、次の7つの「対象を捉える考え方」を設定した。（【表3】を参照）

【表3】 7つの「対象を捉える考え方」

対象を捉える考え方	児童が活用する考え方
特徴	それは、どのようなものか。
機能	それは、どのような役割を果たすのか。
原因	なぜ、そうなのか。
変化	それは、どのように変わるのか。
関連	それは、何とどのようにつながるのか。
視点	どの立場で考えるのか。
責任	どのような責任があるのか。

児童は、この7つの考え方によって、児童は探究を発展させたり、深めたりすることができます。個の活動が充実するために、児童は自分で問いや活動を生み出さなければならない。この7つの考え方を使うことで、児童は、様々な課題を自ら設定し、探究的な学びを進めていくことができる。

この7つの「対象を捉える考え方」は、国際バカロレア機構のPYPにおける「重要概念」を参考にして設定した。

③ 「探究のテーマ」を活用した探究活動

【表4】 「探究のテーマ」の具体例

2年生 D領域の単元	
領域	D：自然と科学
「探究のテーマ」	人は生き物の生存に影響を与える
素材・対象	身近な生き物（ミミズ、ダンゴムシ、ザリガニ、チョウ等）
単元の目標	身近な生き物の飼育や繁殖させる活動を通して、生き物の特徴や上手く飼育できない原因、人の果たす責任といった捉え方で考え、生き物の生存や繁殖は、人間の工夫によって促進されたり阻害されたりするということを概念的に理解し、生き物の生存に思慮深く関わっていくことができるようにする。
小課題	<ul style="list-style-type: none"> ・（特徴）「その生き物は、どのような生き物なのか。」 ・（原因）「その生き物を上手く飼育できないのは、なぜか。」 ・（責任）「生き物が生きていく為に、人はどうすればよいか。」
予想される「探究のテーマ」についての児童の解釈	<p>「生き物のことをよく調べて、知ることができれば、生き物を増やしていける。」</p> <p>「人が自然を壊していくと、生き物も死んでいく。」</p> <p>「人が増やした生き物のせいで、他の生き物が居なくなること。」</p>
児童が創造する価値観の例	<p>「生き物のことをよく知らないと、悪い影響をあたえてしまうので、もっと生き物のことを知ることが大切だ。」</p> <p>「生き物は、自然のままがいいはず。人は、自然の環境を守ることだけががんばることが大切だ。」</p> <p>「人間が世話をして生まれる命もあるので、生き物にとってよい影響を与えていくことが大切だ。」</p>

「探究科」では、「探究のテーマ」という文言を掲げ、その意味を児童が自分なりに解釈

しようと「探究」する活動を設定していることである。「探究のテーマ」とは、「〇〇は私たちの△△に影響する。」のような命題的な文言のことと設定した。「この文言をどう解釈するのか」という問題解決のために、対象について調べたり、問いを立てて検証したり、多様な考えの人と議論したり、実際に社会の中で活用したりといった「探究」活動を、児童が行うことをねらっている。このような活動を通して、学習者である児童自身が主体的に意味を創り出して自分なりの知識を構築していくことができると考えた。

「探究のテーマ」の具体例として、【表4】に2年生の単元の場合の「探究のテーマ」を示す。「人は生き物の生存に影響を与える」という「探究のテーマ」を活用し、児童は、多様な取り組みが可能な探究の範囲を掴み、自身で探究を計画、実行していく。小課題にあるような探究課題を、「探究のテーマ」を基に設定して取り組むことを通し、自分なりに「探究のテーマ」を解釈し、最終的には児童一人一人が自分なりの価値観を創造していくことになる。このような過程で、児童は単元の目標とする姿に近づいていくことができ、そこには「探究のテーマ」が、探究の道しるべとしての重要な役割を果たしていく。

この「探究のテーマ」を活用することで、児童の主体性を損なうことなく、単元の目標に沿った範囲の中での探究活動を、児童が主体的に進めていくことができる。児童が、主体的に学習の取り組み、自らの手で様々なことを見出すことによって、児童の実感を伴った、概念的な理解と人間性の醸成が深く進められると考える。

④十分な個別の追究活動時間の保障

「探究科」では、個別の追究活動の時間を重視している。学級やグループで、共通の問いや活動に取り組むだけでなく、一人一人の子どもに、学びの主導権と選択権を保障し、児童一人一人が、自身の学びを自分でデザインし、自分で取り組むことを重視している。教師は、探究する児童を観察し、必要な時機に思考や活動の方向性について助言することが大切だと考えた。また、6つの領域を設定して、各学年、年間6単元を行うことも必要であり、そのためには、現行の「総合的な学習の時間」よりも多くの時間を必要とすることになる。

「探究科」では、各学年、年間200～230時間の授業時数を設定しており、その授業時数を確保するために、既存教科の授業時数の削減を行っている。【表5】に示されたように、各既存教科によって、授業時数削減への取り組みは異なっている。

【表5】既存教科の授業時数削減の取り組み

既存教科名	削減の取り組みの具体
国語科	「書くこと」「話すこと聞くこと」を中心とした内容を「探究科」の中で指導することとし、各学年、年間70時間程度の内容を「探究科」へ移す。
社会科	指導内容の重点化を行い、年間25時間程度の削減を行う。以下のような考え方で、削減を行った。 <ul style="list-style-type: none"> ・中学校に直接つながる単元は現行のまま実施する。（政治・歴史・日本の国土等の内容） ・3年生から6年生までの4年間全体で、時間的な視点、空間的な視点、相互関係的な視点を育成できるように配慮する。 ・小単元をまとめ、問いの設定時間を縮小する。 ・類似事例については削除する。
理科	指導内容の削減は行わない。指導方法の工夫を行い、年間35時間程度の削減を行う。以下のような考え方で、削減を行った。 <ul style="list-style-type: none"> ・課題設定、予想、実験方法、結果の考察等の過程のうち、単元によって重点的に指導を行う過程を設定し、それ以外の過程についての指導時間数を削減する。 ・関連する内容を統合させて指導する。
算数科 音楽科 図画工作科 家庭科 体育科 特別な教科 道徳	指導内容の重点化や指導方法の工夫を行い、各教科、年間5～10時間程度の削減を行った。
生活科 総合的な学習の時間	生活科と総合的な学習の時間の全ての授業時数を「探究科」の指導時数とする。

(2) 研究の経過

	実施内容等
第1年次	<p><重点></p> <ol style="list-style-type: none"> 探究科の全体理論の構築 次期学習指導要領で示されている、社会科・理科・総合的な学習の時間・生活科で示されている資質・能力や、目指している概念的な理解を考察し、探究科の目標と育成すべき資質・能力及び領域構成を明確にする。 年間指導計画の作成 探究科の単元構想案を作成したうえで、年間指導計画案を作成する。 探究科学習過程モデルの作成 探究的活動のモデルを作成し、探究科の学習過程を明確にする。 評価方法の検討 過去の実践から、探究科の単元におけるルーブリック及び、児童に示すルーブリック（振り返りシート）を、学習過程毎に作成する。 探究科の一部の単元について実践を開始 1～4で示す理論について、実践を通して検証する。
第2年次	<p><重点></p> <ol style="list-style-type: none"> 探究科の本格的実践研究 各学年、年間2単元の実践をする。 評価方法の再検討 1年次に準備した評価方法に基づき、児童の資質能力についてのデータから、授業実践の効果を検証し、ルーブリックを改訂しながら、次年度の児童に示すルーブリック（振り返りシート）を、学習過程毎に作成する。 探究科の全体理論の検討 1、2の内容を受けて、全体理論及び新教科目標や年間計画等について修正する。
第3年次	<p><重点></p> <ol style="list-style-type: none"> 探究科の実践研究の継続 探究科の実践を積み上げる。各学年年間4単元を実践。 評価活動の継続及び理論・教育課程の修正 評価をさらに継続し、年間単元配列の修正や改良、評価項目、ルーブリックの検討、自己評価カードの改訂を行う。
第4・5年次	<p><重点></p> <ol style="list-style-type: none"> 探究科の実践研究の継続 <ol style="list-style-type: none"> 各単元の成果と課題に基づく再検討修正 研究内容の焦点化に基づく提案理論の整理 <ol style="list-style-type: none"> 第3年次終了までに研究内容を焦点化し、提案理論を整理する。 研究全体を評価して成果と課題をまとめ、提案発表を行う。 総合的な学習の時間との違いの明確化 「探究科」創設のデメリットの明示 新教科「探究科」の教育課程提案による、既存教科内容再配列の提案。 個の評価方法の確立 <ol style="list-style-type: none"> 個の評価方法を確立し、個の評価を継続的に行う。 個の評価方法を確立し、その具体事例を基に提案をする。

(3) 評価に関する取組

	評価方法等
第1年次	<p>○東京学芸大学次世代教育研究推進機構との共同研究を行う</p> <p>○評価項目・ルーブリック・評価方法の検討</p> <ol style="list-style-type: none"> 学習活動に応じた評価の観点（規準）の精査 評価方法の検討と一部実施 評価観点に基づいた、ルーブリック作成と、パフォーマンス評価、自己評価カード等について検討する。観察対象児童を選定し、児童の自己評価が実際に現れる場面を分析する。 試験的に実践した授業について、一部評価を実践する
第2年次	<p>○東京学芸大学次世代教育研究推進機構との共同研究で行う。</p> <p>○授業実践における児童の資質能力の評価の蓄積 二年次は、授業実践が増えることに伴い、児童の資質能力に関する評価を</p>

	積み重ね、データを蓄積する 1. 授業実践とともに、評価を具体的に行う 実践前、中間、後に汎用的資質・能力の変容を読み取る。自己評価から評価基準を見直した上で、全体及び個人の変容を読み取る。 2. 学習効果から教育課程の改善を検討する 3. ルーブリックや評価の観点について、必要な修正を行う。
第3年次	○授業実践における児童の資質能力の評価の蓄積と前年との比較検証 三年次は、二年次に得られた評価実績をもとに、全体及び個人での変容を前年度と比較すると共に、経年的にも読み取り分析する。 1. 評価を継続的に行い、評価データを蓄積する 2. 前年度のデータとの比較を行う 3. ルーブリックや評価の観点について修正 4. 児童に新設する「探究科」についてのアンケート調査
第4・5年次	○「探究科」の資質・能力の改訂に伴う、具体的な評価方法の再検討 1. 各学年部からの評価方法の提案 2. 校内研究会での評価方法の検討 3. 検討された評価方法による研究の評価の実施 ○新設教科「探究科」における提案内容の焦点化 1. 第3年次までの実践を基に、研究内容を整理し提案内容を焦点化する。 2. 新設教科「探究科」の取り組みについて、理論面及び運営面での評価検証を行い、その実施の可能性について提言をまとめる。その際、次に点について明らかにしていく。 ①個人追究活動の可能性と指導の工夫について明らかにする。 ②総合的な学習の時間との違いを明確にして提案する。 ③「探究科」創設のデメリットについても明らかにする。 ④「探究科」を運営する上で、必要となる工夫や障害となる事項について明らかにする。

5 研究開発の成果

(1) 実施による効果

①児童・生徒への効果

資質・能力	効果の具体的な内容	関連する実施項目				
		6領域の設定	7つの対象を捉える考え方の設定	「探究のテーマ」の活用	年間200時間以上の授業時数	個別の追究活動の重視
知識及び技能	・6つの領域による、偏りない単元を構成	◎			○	
	・教科横断的に既存教科と関連させた指導	○			○	
	・知のネットワーク化を行う姿	○	○	◎	○	○
	・外部との連携による資質・能力の向上	○				
	・日本や世界が抱える課題の取り扱い	○		○		
思考力・判断力・表現	・問いを設定する力の向上		◎	○		◎
	・対象を捉える考え方の、児童による意識化		◎	○	○	◎
	・明確な問いの設定と、自分の考えをまとめられる姿		◎	○	○	◎
	・自己評価の観点を設定する際のIBのATLスキルの活用		◎	○	○	◎
学びに向かう力、人間性等	・「探究科」への高い意欲		○	○	○	◎
	・一人一人の児童の自立した活動			○	○	◎
	・未知のものに対する向き合い方の変容		○	◎		◎
	・学びを自己調整ができる児童の姿		◎	○	◎	◎
	・自身で探究のサイクルや学び方を身につけようとしている姿		◎	○	◎	◎
	・他者との結びつきを重視し自ら動く姿勢				◎	◎
・全国学力学習状況調査での無回答率の少なさ		○	◎		◎	

◎…大きく影響する実施項目 ○…影響する実施項目

②教師への効果

評価項目	効果の具体的な内容	関連する実施項目				
		6領域の設定	7つの対象を捉える考え方の設定	「探究のテーマ」の活用	個別の追究活動の重視	週一回の学年探究科打ち合わせ
児童への理解	・児童の実態に合わせた学習計画				◎	◎
探究科の理解	・6つの領域、7つの対象の捉える考え方による、自由度の高さかつ、範囲の決まった学習の構想	◎	◎	◎	◎	
	・児童の学習経験からのカリキュラム構築			○	○	
	・小課題の展開の柔軟な発想	○	◎	○	○	
指導方法等の改善	・6つの領域や7つの対象を捉える考え方による単元の差別化	◎	◎			
	・児童が主体的に取り組むことができる単元構想		○	○	○	
教員間の連携・協力	・指導計画作成に教員全員が進んで関わる姿勢					◎
	・毎週1時間の探究科の打ち合わせの時間の確保による授業力の向上や同僚性の構築					◎
教員の意欲	・教師自身の単元構想に対する探究する姿勢	○	○	○	○	◎

◎…大きく影響する実施項目 ○…影響する実施項目

③保護者への効果

効果の具体的な内容
<p>【家庭でも学習を進める児童の姿と保護者による理解と支援】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保護者に「探究科」の取り組みを伝える機会を増やすことができた。 ・自己評価シートへのコメントを、保護者にも行ってもらい取り組みも効果的であった。 ・そのコメントには、家庭でも児童が自主的に興味のあるものを調べるなどしている姿が出てきたとの記述が増えてきた。教師の側も、児童の過程での様子を知ることができる。 ・保護者からのフィードバックを含めた協力が、児童の主体性をさらに高めた。 ・どのようなことを保護者が協力できるのかを調査し、協力体制を整えるとさらに成果が得られると考えられる。

④実施による望ましくない影響

望ましくない影響の具体的な内容
<p>【児童への影響：個別の追究活動を重視することによる協働的な学びへの影響】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・個の追究をするあまり、学級全体での達成感、学びを通しての友達のよさなどの気付きを感じる機会が少なくなっている。
<p>【児童への影響：個別の追究活動を重視することによる個人差】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・基礎的な学習の力が十分でない児童への手立てが探究科の時間にはかなり必要になる。 ・個の学習に差が生まれてしまう。ある程度調べたら満足してしまう児童もいる。
<p>【教師への影響：検討項目の増加】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・単元を構想するにあたって検討する要素が多く、週1回の打ち合わせでは時間が足りないこともあった。見通しをもち、何を大切に話し合うのかを検討していく必要がある。
<p>【保護者への影響：家庭への協力を依頼した場合の影響】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各家庭への負担の増加。・家庭での協力体制の違いによる児童の活動内容における個人差。

(2) 実施上の問題点と今後の課題

①研究の実施上の問題点

項目	問題点の具体的な内容
年間6単元の実施	<ul style="list-style-type: none"> ・1年生の児童が1年間で6単元を行うことは難しい。 ・2か年で6領域など、一単元に十分な授業時数を設定することも検討。
単元構想の検討	<ul style="list-style-type: none"> ・前年度のカリキュラムが本年度に生かされるとは限らないため、週1回の検討では時間が足りない。 ・探究の過程を複数回経由した際に、それらが最終的に一つの「探究のテーマ」に繋がっていかないことがある。 ・小課題の進め方、探究のテーマの文言、パフォーマンス課題等を十分に検討し切ってから学習を進められていない現状がある。
既存教科の学習内容との連携	<ul style="list-style-type: none"> ・元々の教科の系統性と探究科の関係を、検討することが難しい。
学習課題の設定	<ul style="list-style-type: none"> ・学習課題（パフォーマンス課題）のあるべき姿について考えていく必要がある。一般社会に関連するもの、児童の個人の生活に結び付くもの、学校内での生活や取り組みに結び付くもの、何が最適なのか。
校内の研究体制	<ul style="list-style-type: none"> ・研究部が吸い上げる部分と、研究部が形としておろす部分のバランス ・週1回の学年探究科打ち合わせは有効だが、それでも時間が不足する。

②今後の課題

評価項目	課題の具体的な内容
運営面・研究体制	<ul style="list-style-type: none"> ・「探究科」全体をコーディネートする役割の教員を専科で設けること。 ・行事等の特別活動も含めた教育課程全体からカリキュラムを見直す必要がある。学校教育目標からのカリキュラムマネジメントモデルを意識する。
カリキュラム構想全体	<ul style="list-style-type: none"> ・個別指導の時間があまり確保できなかった。 ・「対象を捉える考え方」について、どの単元でどの考え方の指導を重点化するのか、年間でのバランスについて再調整が必要である。
知識及び技能	<ul style="list-style-type: none"> ・低学年児童における概念形成の姿を、教員全体で共有する必要がある。 ・芸術を扱う教科と関連させた探究科単元づくりに取り組み必要がある。 ・知のネットワーク化をどう把握するのかを検討していく必要がある。 ・自身の生活や社会に対する具体的な行動をする機会をさらに増やしたい。 ・同じ領域の中で、様々な対象を6年間でバランスよく配置したい。
思考力、判断力、表現力等	<ul style="list-style-type: none"> ・ネットに固執せず、様々な材料から情報を収集する力の育成。 ・学んだことをアウトプットする力（表現力）を高めたい。 ・「対象を捉える考え方」の扱いや比重についての全体での共有。
学びに向かう力、人間性等	<ul style="list-style-type: none"> ・適切且つ効果的な自己評価の実施。 ・価値観の自覚化に関する、具体的な姿の教員間での共有。 ・「探究のテーマ」が児童の生活や問題意識と繋がるように検討。 ・自己評価シートを児童にとってさらに必要感のあるものにしていく。 ・各学年間での同一領域における学習が、児童の意識の中でどのように関連を持っていたり、継続性が見出されていたりするののかについての検証。

【別添1】－別紙2

東京学芸大学附属大泉小学校 教育課程表（令和3年度）

	各教科の授業時数										特別の教科である道徳	外国語活動	総合的な学習の時間	特別活動	新設教科	総授業時数
	国語	社会	算数	理科	生活	音楽	図画工作	家庭	体育	外国語						
第1学年	238 (-68)	/	131 (-5)	/	0 (-102)	64 (-4)	65 (-3)	/	97 (-5)	/	20 (-14)	34 (+34)	/	34	201 (+201)	884 (+34)
第2学年	245 (-70)	/	165 (-10)	/	0 (-105)	66 (-4)	65 (-5)	/	100 (-5)	/	20 (-15)	35 (+35)	/	35	214 (+214)	945 (+35)
第3学年	175 (-70)	55 (-15)	165 (-10)	75 (-15)	/	56 (-4)	55 (-5)	/	100 (-5)	/	25 (-10)	35	0 (-70)	35	204 (+204)	980 (0)
第4学年	175 (-70)	65 (-25)	165 (-10)	70 (-35)	/	56 (-4)	55 (-5)	/	100 (-5)	/	25 (-10)	35	0 (-70)	35	234 (+234)	1015 (0)
第5学年	105 (-70)	75 (-25)	165 (-10)	70 (-35)	/	46 (-4)	45 (-5)	58 (-2)	85 (-5)	70	25 (-10)	/	0 (-70)	35	236 (+236)	1015 (0)
第6学年	105 (-70)	75 (-30)	165 (-10)	70 (-35)	/	46 (-4)	45 (-5)	53 (-2)	85 (-5)	70	25 (-10)	/	0 (-70)	35	241 (+241)	1015 (0)
計	1043 (-418)	270 (-95)	956 (-55)	285 (-120)	0 (-207)	334 (-24)	330 (-28)	111 (-4)	567 (-30)	140	140 (+69)	139 (+69)	0 (-280)	209	1330 (+1330)	5854 (+69)

※ 第1、第2学年の外国語活動の時数増については、本研究と直接のかかわりのあるものではない。

学校等の概要

1 学校名、校長名

トウキョウガクゲイダイガクフゾクオオイズミシヨウガッコウ

学校名：東京学芸大学附属大泉小学校

スギモリ シンキチ

校長：杉森 伸吉

2 所在地、電話番号、FAX番号

所在地：東京都練馬区東大泉 5-22-1

電話番号：03-5905-0200

FAX番号：03-5905-0209

3 課程・学科・学年別幼児・児童・生徒数、学級数

(小学校の場合)

第1学年		第2学年		第3学年		第4学年		第5学年		第6学年		計	
児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数
90	3	92	3	96	4	101	4	105	4	104	4	588	22

4 教職員数

校長	副校長	教頭	主幹教諭	指導教諭	教諭	助教諭	養護教諭	養護助教諭	栄養教諭	講師
1	1	0	1	0	26	0	1	0	1	5
ALT	スクール カウンセラー	事務職員	司書	計						
2	2	4	1	45						